東アジアの朱子学における「情」論の理解と展開

嚴 錫 仁

はじめに

本稿は、儒教思想の「情」、特に朱子学の性(理)・情論における「情」概念に焦点を当て、宋明・朝鮮・江戸朱子学の何人かの学者たちの理解を取り上げながら、その特徴的な展開様相の一端を概観しようとするものである。

儒教思想の「情」の内容をもっとも簡潔に表しているものとして、『礼記』礼運篇の「人間の情とは何か。喜怒哀懼愛惡欲である。この七つのは学ばなくても生まれながらにして人間に備わっている(何謂人情。喜怒哀懼愛惡欲。七者弗学而能)」という言葉がある。今日でいう「喜怒哀樂や好悪など、物事に感じて起こる⁽¹⁾気持」としての「感情」の定義の淵源ともなるが、儒教思想においてこの人間の「情」は、道徳を重視する立場から、大概その実現を妨げる厄介なものとして否定的に捉われる傾向が強かった。

後漢の西暦一〇〇年頃に成立した中国最古の漢字字書の『説文解字』では、「人の陽気、性善なるもの(人之

陽氣、性善者也」という「性」に対して、「情」は「人の陰氣、欲あるもの（人之陰氣、有欲者也）」と、否定的なイメージを帯びる「欲心」「欲望」をもって解釈している。同じ後漢時代に成立した（七九年頃、章帝の詔勅より編纂が始まる）儒教書の一つの『白虎通義』では、「情は陰の氣から生まれ、時々の欲心によって思い起こされる。性は陽の氣から生まれ、道理に就こうとする。陽気なるものは仁であり、陰気なるものは貪（欲）である。それゆえに情には利欲があり、性には仁がある（情生于陰、欲以時念也。性生于陽、以就理也。陽気者仁、陰気者貪、故情有利欲、性有仁也）」⁽²⁾と、より具体的に「貪（欲）」「利欲」をもって、「性」に対する「情」の否定的な性格を浮き彫りにしている。⁽³⁾後代の朱子学勃興の重要な一端をなす、李翱（七七二～八四二）の「復性書」の中の「滅情論」は、そうした儒教思想史における否定的な情論を集約するものであった。

しかし、儒教思想の中の情論にはそれとは異なるもう一つの議論がある。それは『孟子』に由来する惻隠・羞悪・辞讓・是非という純粋な善の現れとされる「四端説」である。朱子学の情論は、この四端説をも取り入れ、「滅情」とは違う方向の、人間の感情をコントロール（中節・和）するという基本的な立場において、未発已発論、静動論、体用論、さらには心統性情論など、豊かな議論を展開した。

そして、朱子（熹、一一三〇～一二〇〇）と彼の後継者たちによる宋代の朱子学の情論は、朝鮮時代および江戸時代の思想史に影響を与え、各地域において独自の理解と展開を遂ることになる。本稿では、南宋の陳北溪（淳、一一五九～一二三三）、明の羅整菴（欽順、一四六五～一五四七）、朝鮮時代の李退溪（滉、一五〇一～一五七〇）、江戸時代の崎門学派（山崎闇斎〔一六一九～一六八二〕、佐藤直方〔一六五〇～一七一九〕、浅見綱斎〔一六五二～一七二二〕）における「情」への視座を取り上げ、それぞれの異なる展開を概観することを試みる。